現代ベトナム中等教育における私的補習への駆動構造

―都市部における新しいライフコースの理想像―

関　口　洋　平
（畿央大学）

『国際教育協力論集』第 28 巻 第 1 号 , 1-14 頁 , 2025 年 10 月
広島大学教育開発国際協力研究センター

広島大学教育開発国際協力研究センター『国際教育協力論集』第 28 巻 第 1 号（2025）1 ～ 14 頁

現代ベトナム中等教育における私的補習への駆動構造
―都市部における新しいライフコースの理想像―

関　口　洋　平
（畿央大学）

はじめに

日本や韓国、シンガポールをはじめとして、アジア諸国では近代化と経済発展の過程で教育は量的な拡大を遂げ、程度に相違はあるものの、多くの国ぐにおいて個人の学歴や学業成績が就職、賃金と一定程度関連する業績主義的な社会が形成されてきた。そこでは序列化された教育システムが編成されることで、より高く教育階梯を上るとともに、よりよいとされる教育機関で学ぶべく、私的補習が拡張してきている。近年こうした動きは後発国を含めて世界規模でみられるようになっており、ブレイは私的補習の量的拡大を生じさせてきた基本的な動力は社会的な競争性であるとする。すなわち、EFA から SDGs に代表される教育拡大を志向する国際開発目標は、中等教育をはじめとする義務教育後の教育を拡張させ、同時にそれが当該社会の競争性を高める可能性を指摘している（Bray 2023）。

こうしたレンズからベトナム社会主義共和国（以下、ベトナム）をみてみよう。ベトナムでは、1986 年にドイモイ政策を打ち出して以降、共産党による一党支配のもとで計画経済体制から市場経済体制への移行（以下、体制移行）が進められてきている。その過程で、ベトナムは工業化と現代化を国家発展の方向性とし、一貫して教育を重視しながら、とりわけ優れた人材の発見と育成に重要な意義を見出してきた。具体的な動きをみれば、主として 1990 年代以降専門高校と呼ばれる才能教育を担う後期中等教育制度が整備され、近年では都市部を中心に高品質中学校という新類型の前期中等教育機関が現れている。本稿では、こうした中学校を英才中学校と呼ぶ。現在ベトナムでは学歴社会化が進展しており、「もてるもの」が望ましい教育機会を求めて「奔走」し、より質の高い教育機関への就学を目的として私的補習が拡張している状況が確認できるのである（関口・吉村 2023）。

ベトナムの教育訓練省は私的補習の拡張をうけ、アクセスに関わる公正性や学習者の心身への負担という観点から、それに対する抑制政策を打ち出してきた。特に、2024 年 12 月には第 29 号通達を発出、教育訓練省は「5 つの禁止」を明示して私的補習を厳格に制限する政策を採っている（Bộ giáo dục và đào tạo 2024）。すなわち、禁止の対象は①小学生に対する私的補習、②学校教員による勤務先学校の生徒に対する課外での有償私的補習、③公立学校教員に対する課外での私的補習の管理運営、④学校内での有償私的補習、そして⑤カリキュラムを先取りする学校内での私的補習である。「5 つの禁止」から有償の私的補習として認められているのは大きく、中等教育段階の私的補習であるといえる。

このような状況から浮かび上がるのは、体制移行に伴いベトナム都市部ではいかなる進路が理想化され（ライフコースの理想像）、特に中等教育において私的補習はどのように位置づいているのかという問いである。こうした問題意識から先行研究をみると、私的補習に関する研究の国際的潮流と

して、近年では教育機関や私的補習講師を対象とするミクロな視点での研究の重要性が指摘されているように（Bray 2023）、先行研究の多くはマクロな視点から行われてきた。特にベトナムの私的補習に関する研究は、統計資料に基づくダンによる一連の定量的な研究（Dang 2007; 2008）を除けば、国際的にも極めて限定的であった。一方で、ミクロな視点をもつ主要な研究として、グエンらはベトナム農村部の学校教員に対して私的補習の実態に関する研究を行っているが（Nguyen, Le & Duong 2025）、私的補習への教育熱がより高いといえる都市部を対象としたものではない。総じて、先行研究は、ベトナム都市部の特定の教育機関と私的補習との関係に着目し、何が学習者や保護者を私的補習へと駆り立てるのかという視点から私的補習という事象に切り込んではこなかった。

以上をふまえて本稿では、ベトナム都市部において体制移行に伴いライフコースの理想像はいかに変容したのかという問題意識のもと、中等教育機関類型として英才中学校と専門高校に焦点をしぼり、ハノイ市を中心に学習者・保護者を私的補習へと駆り立てる構造（私的補習への駆動構造）について明らかにすることを目的とする。その際、ベトナムの私的補習に関する先行研究が限定的であることから、研究方法としてこれらの中等教育機関教師への聞き取りの内容を中心に論考を進める。本稿はベトナムにおける私的補習の全体像を体系的に明らかにするものではないが、その意義は日本で初めて本格的にベトナムの英才中学校や専門高校の実態を明らかにするのみならず、こうした特定の中等教育機関と私的補習との相互関係を考察することで私的補習研究の国際動向に貢献できる点である。

本稿の構成は次のとおりである。まず、従来体制の特徴を確認するため、計画経済体制が採られた国家社会主義体制下におけるベトナムの中等・高等教育システムのありようとライフコースの理想像について検討する（第 1 節）。それをふまえ、体制移行の過程における社会変容と中等教育の実態について切り込む。具体的には、英才中学校における教育的特徴と私的補習の実態（第 2 節）及び専門高校における教育的特徴について検討したうえで（第 3 節）、専門高校教師と私的補習との相互関係について検討する（第 4 節）。ここまでの議論をふまえて考察を行い、ベトナム都市部における私的補習への駆動構造を明らかにするとともに、その新しいライフコースの理想像について洞察を得る（第 5 節）。

本論の検討に先立ち、用語の定義について述べておく。ライフコースとは「個人が時間の経過の中で演じる社会的に定義された出来事や役割の配列」とされる（ジール・エルダー 2003）。本稿では、ライフコースの時間軸として前期中等教育への進学から高等教育への進学という「出来事」に主として着目する。その進路選択を力学的に捉えるためには「個人の動機と外的制約の統合」及び「過去の経験と将来の期待」という視点が重要となる（同上）。

1．体制移行とライフコースの理想像：国家社会主義体制下の「紅と専」

それではまず、体制移行以前のベトナムにおいて理想とされた人物像ないしエリート像について、教育システムと関連させて検討することからはじめよう。ここで確認しておきたいのは、従来の国家社会主義体制（以下、従来体制）では国家の社会主義建設のために「紅と専」と呼ばれる概念、すなわち社会主義的道徳性（紅）と専門性（専）が重視され、この 2 つの要素を有する人物が理想とされたことである。北ベトナム（ベトナム民主共和国）において国家の社会主義建設が本格化した 1950 年代をみれ

ば、1956 年には第二次教育改革によりすべての教育段階で民営セクターが廃止され、教育制度は国家の厳格な管理下に置かれるとともに、社会主義的性質をもつ教育システムの構築が目標とされた。教育が志向するのは「才と徳」（すなわち、「紅と専」）を備えた「よき労働者」や「よき幹部」の養成とされたのである。また、1958 年には「社会主義学校建設運動」が打ち出され、あらためて教育の目標は社会主義の思想性と専門性の涵養、健康増進であると規定された。

こうした社会状況を背景に、とりわけベトナムの大学には国家の社会主義建設に資するエリート人材を育成することが期待され、大学入学者選抜では学生の専門性に加えて政治性が重視された。南北ベトナムの統一後、大学省による 1976 年の第 1 号通達「大学入学者選抜工作に関する通達」では、学生選抜における重要な要素の 1 つは政治的基準とされ、大学を受験するには本人の身上が重要な位置を占めた。具体的には「学生の本性は、政治的資質と道徳性が優れていなくてはならず」、「国内の大学に進学を希望し重点領域を専攻するものは、優れた政治品性を備えていなくてはならない」などの規定が存在した。実態としても、大学に進学するには受験生は党の下部組織であるホーチミン労働青年団に加入する必要があった（関口 2024）。

従来体制下のベトナムでは、教育の量的規模は相対的に小さく、計画経済体制が採られていたことから、進学に関わる競争は抑制的であり私的補習は局所的に展開したといえる。統計から教育の量的規模を確認すると、1979 年度では普通教育機関に在籍する学習者の総数は 11,803,869 人であったが、その内訳は初等教育段階では 8,025,909 人、前期中等教育段階では 3,139,739 人、そして後期中等教育段階では 638,221 人である（Bộ giáo dục và đào tạo 1995）。進学状況をおおまかに把握するべく、5 － 4 － 3 制と仮定して一学年あたりの就学規模について概数を割り出すと、比率は初等教育段階を 1 として前期中等教育段階では 0.5、後期中等教育段階では 0.12 となる。なお、高等教育段階では同様にして 0.02 程度となり [(1)]、大学は言うまでもなく高校進学率も極めて限定的であったことがわかる。

このように従来体制では、極めて学力の高い一部の生徒のみが高校や大学に進学した。具体的な状況を把握すべく、1970 年代当時の状況について T 女史への聞き取り [(2)] を一事例として以下に記述しよう。ハノイ市の中心部（タイ湖）に生まれ、1974 年にチュー・ヴァン・アン高校（2025 年現在、専門高校）に入学した T 女史によれば、私的補習は大学入学者選抜試験などのハイ・ステークスな試験の準備のために高校内で受けるということであった。T 女史は高校 3 年間のうち最終年次（第 10 学年）のみ私的補習を受講したが、それは 1 週間に約 6 時間（3 コマ）であった。ベトナム戦争末期、高校生として過ごした時期を牧歌的に回顧し、休日や長期休暇は「オーアンクアン」（ベトナムの囲碁）やビー玉遊び、かくれんぼ、サイクリングなど、タイ湖のほとりで友人と遊んで過ごしたという。T 女史は大学受験を視野に入れ政治的要件を満たすため、高校 2 年次からホーチミン労働青年団に入団した。道徳性が低いと評価されたくなかったのが理由であるという。その後、国民経済大学に進学し、卒業に際しては国家による計画的な配属を受けて鉱山研究所に研究員として勤務した。

総じて、従来体制では極めて狭き門である後期中等教育や高等教育を経て、国家官僚、医師、教員などの職に就いた知識人層（Trí thức）は「人民に奉仕する」ことを「教えられ」、学歴やその職業は名誉の対象となった。ただし、そうした個人間の能力が所得に反映されることはなく、また、主体的な職業選択や社会経済的上昇は大きく制

限された（岩井 2004)。その小規模性と非競争性のため、彼らは「紅と専」を備えたエリート像を代表するものであっても、ライフコースの理想像として広くベトナム社会に受容されるものではなかった。

2．英才中学校の特質と私的補習の実態：外国語中学校を事例として

現代のベトナムでは、ライフコースの理想像はどう捉えられ、私的補習はいかに位置づけられるのだろうか。本節では、とりわけ高い競争倍率を有する外国語中学校を事例に、ハノイ市都市部における英才中学校の教育的特徴と在籍生徒の私的補習の実態を検討する。

2.1. 英才中学校の特徴：外国語中学校の入試状況・カリキュラム・進学状況を中心に

体制移行に伴い、ベトナムでは就職に際しての国家的計画・配分制度は廃止され、個人は主体的に就職活動を行なうようになった。また教育の量的拡大が進み、2020年には都市部の高校進学率は80％を超えており、後期中等教育は急激に拡張してきている。こうした過程でベトナム社会は全体として学歴社会の様相を示すようになり、そこでは「紅と専」というよりはむしろ「専」が重視されてきている。具体的に大学入学者の選抜制度をみれば、体制移行に伴い政治性（「紅」）の規定が廃止され、主として受験生の学力（「専」）によって進学の可否が決まるようになっているし、国家機関や私企業に勤務する場合でも、専門性を高めてより高次の学位を取得することがキャリアアップを保障するものとして捉えられる。

ベトナムの中等教育システムにおいて、新たに制度整備が進められてきた専門高校や高品質中学校は専門性を重視するベトナム社会の文脈に位置づけることができる。専門高校については第3節以降で検討するが、高品質中学校は一般の公立中学校とは異なり、①公立学校であるものの独自の入学者選抜を実施できること、②より高度なカリキュラムを展開することが認められている。ハノイ市では150校程度の公立中学校があるなかで、高品質中学校として認定を受けているのは5校に過ぎない。本稿では、すでに述べたように、この2つの特性をもつ中学校を英才中学校と呼ぶ。そして、本節で英才中学校として検討の対象とするのは、高品質中学校として認定を受けることを志向し、極めて高い受験倍率を有するハノイ国家大学外国語大学附属外国語中学校である（以下、外国語中学校)。

現在では、共産党機関紙『ニャンザン』をはじめとして、多くのメディアで英才中学校の入学試験に関して前年度との変更点が報じられるようになるなど、ベトナム社会では英才中学校への関心が高まってきている。具体的に以下では、英才中学校への社会的関心の高さと関連させて、外国語中学校における入試状況、カリキュラム、進学状況の特徴について検討する。第1に、外国語中学校は2019年にハノイ国家大学構成員大学である外国語大学の附属中学校として設置されたが、その当初から魅力的な進学先として社会の高い関心を集め、極めて高い入試倍率のもと、競争的な学力試験を経て児童が進学するという状況が続いている。具体的にみれば、2019年度は100人の定員枠におよそ3,000人（倍率30倍）の児童が受験しており、2024年度は150人に対し2715人（倍率18倍）が受験した。同校の入試倍率は20倍前後を維持しており、一貫して多くの児童、保護者が競争的試験に関与してきたのである。

第2に、外国語中学校ではより高度なカリキュラムが提供されている。同校はナショナル・カリキュラムに加えて、ドイツ語や日本語、韓国語、中国語から選択する「外

国語科Ⅱ」や、パブリックスピーキングなどの特殊科目を提供している。そして、英語を学校内の第二教授言語として打ち出し(いわゆる、ESL)、学校内の掲示物など言語環境の英語化を推し進め、各教科においても英語の使用が奨励されるようになっている。ここでは隠れたカリキュラムがある点も重要であり、例えば同校の階段にはアインシュタインをはじめとする著名な科学者の肖像画が複数かけられていたり、廊下には各国の国旗が掲げられている。この点で、同校の教育には国際的に活躍できる人材や研究者への志向性があるといえる。

そして第3に、英才中学校では卒業生の多くが専門高校に進学する。具体的に外国語中学校では2023年5月に第一期生が卒業したが、そのおよそ80％の生徒が専門高校に進学しており、2025年5月には70％の生徒が専門高校に進学した[(3)]。こうした進学状況を維持・強化するべく、生徒の学力は外国語中学校の教員のみならず、その保護者によっても監督できる体制が採られている。同校では、保護者にIDとパスワードが付与されることで、保護者がオンライン上で子弟の校内成績を随時確認することができるようになっているという[(4)]。

2.2. 外国語中学校における私的補習の実態

こうした状況をふまえて本項では、外国語中学校における私的補習の実態について明らかにする。2023年9月5日に同校において実施した第6学年（初年次）及び第9学年（最終学年）の全生徒を対象とする質問紙調査の結果について検討しよう。質問紙調査の内容は主として、①最終学歴・留学に関する希望、②私的補習の受講状況、そして③私的補習を受講する目的と受容のありように関わるものである。その結果を示せば、表1のようになる。

表1　外国語中学校在籍生徒の最終学歴・留学に関する希望（2023年9月）

【第6学年】**希望する最終学歴**（137人回答/141人）			
高校：7（5.1%）	大学：57（41.6%）	修士：39（28.46%）	博士：34（24.81%）
留学の希望：99人（72.26%）　米：34、独：29、日：18、英：15、豪：14			
【第9学年】**希望する最終学歴**（95人回答/98人）			
高校：3（3.15%）	大学：36（37.89%）	修士：35（36.84%）	博士：21（22.1%）
留学の希望：66（69.47%）米：18、豪：14、星：12、日：11、英：10			
【第6学年】**受講者数**：113/141　**受講数**：3.42コマ/週　**受講時間**：401分/週			
【内容】英：90　数：78　語文：31　科学：5　外国語：26　弁論：10　ピアノ：10			
【場所】センター：79　講師自宅：51　オンライン：26			
【第9学年】**受講者数**：97/98　**受講数**：5.63コマ/週　**受講時間**：860分/週			
【内容】英：84　数：91　語文：87　科学：31　社会：2　外国語：11　ピアノ：2			
【場所】センター：55　講師自宅：53　中学校：31　専門高校：4　オンライン：2			
【第6学年**受講目的**】学校内試験：68　学校の学びでは不十分：43　質の高い高校を受験するため：73　保護者の勧め：55　学習が好きである：38			
【第9学年**受講目的**】学校内試験：65　学校の学びでは不十分：50　質の高い高校を受験するため：92　保護者の勧め：42　学習が好きである：26			

（出典）発表者作成。単位は人。

まず、表1からは外国語中学校生徒の高学歴・国際志向という特性が明らかになる。すなわち、最終学歴・留学に関する希望をみれば、第6学年、第9学年の生徒いずれも大多数が大学への進学を希望しており、なかでもその過半数が大学院レベルへの進学を望み、博士課程への進学も全体の20％程度となっている。また、第6学年、第9学年いずれも70％程度の生徒が英語圏（米・英・豪）を中心とする外国への留学を希望していることは、ライフコースの理想像との関わりから特に強調しておく必要がある。後述するように、専門高校の卒業生の一定数が留学することに鑑みれば、英才中学校では、生徒の多くが専門高校に進み留学を経ることで、将来的に国際的に活躍できる人物となることを志向しているといえる。

次いで、外国語中学校生徒による私的補習の受講状況をみてよう。受講時間と内容についてみれば、第6学年では一週間あたりおよそ3コマ、400分程度の受講が平均的であるといってよい。その内容は英語や数学を主としながらも、「弁論」、「ピアノ」などを学ぶ生徒もおり、私的補習には一定程度の多様性が認められる。一方、第9学年ではそれは一週間あたりおよそ5コマ、860分程度となり、私的補習の頻度・密度が倍増する。そして、その内容は主として高校受験に直結する英語、数学、語文に集中するようになっている。

また、私的補習の受講場所について、第6学年、第9学年ともにセンター（Trung tâm）が主要な形態である。第6学年ではオンライン形式での私的補習が一定数確認できる（23％）のに対して、第9学年ではオンライン形態の私的補習が大きく減少し（2％）、代わりに外国語中学校での補習（31％）が主要な形態の1つになっており、若干名ではあるが専門高校で学ぶ生徒も確認できる。ここからは、第9学年を中心に外国語中学校として私的補習の機会を作りだしていること、そして外国語中学校と専門高校との一定のつながりがあることが示唆される。では、こうした生徒にとって私的補習の目的は何だろうか。

外国語中学校の生徒が私的補習を受講する目的についてみれば、第6学年、第9学年ともに「質の高い高校を受験するため」、つまり専門高校への入学がその目的であるといってよい。とりわけ、第9学年では94％の生徒が私的補習を受講する理由の1つにこのことを挙げている。加えて、「学校の各試験で高得点を取るため（よい成績を取りたい）」、「学校で学ぶだけでは各教科の知識内容を十分に理解することができない」、そして「両親が勧めた（強制した）から」を理由とする生徒も一定数存在する。こうして外国語中学校の私的補習の状況をみれば、全体として「学習が好き」であるからというよりも、専門高校に入学するための試験準備など、外圧的な理由から私的補習を受講する傾向にあるといえる。

3．専門高校の特質：卓越性と威信の源泉

それでは、ベトナムにおける専門高校とはいかなる高校なのか。本節では、専門高校で展開されている教育に関わる特徴とその卓越性について検討する。

3.1. 専門高校の概要と教育的特徴：入試状況・カリキュラム・進学状況

専門高校の定義について「ベトナム2019年教育法」では、専門高校は「全人的な普通教育を前提とし、特定の学問分野において各生徒の特別な才能を伸ばし、優秀な人材を養成するための資源を創り出し、国の発展ニーズに対応することを目的とする」と規定されている。すなわち専門高校は、国家発展への貢献を前提に特定の科目に関して優れた才能を有する生徒を対象とする

特殊な中等教育機関として、より専門性の高い教育を実践する高校類型であるといえる。量的規模について政府は、すべての高校生に占める専門高校の生徒の割合を「2%」に抑えるべく政策を打ち出してきたが（Thủ tướng chính phủ 2010）、ハノイ市に所在する専門高校は8校を数え、これらは多くの保護者や中学生にとって魅力的な進学先となっている。以下では、前節と同様の3つの視点から専門高校の特徴を検討する。

第1に、入試状況の特徴としてその競争性の高さが挙げられる。競争倍率をみると、通常の高校はその多くが1.0倍から2.0倍の範囲に収まる。一方で、専門高校は基本構造として各地方省・中央直轄市に設置される専門高校と、ハノイ市やホーチミン市などの都市部の大学が設置する専門高校という2つの設置形態があるが、程度に相違はあるものの、全体として熾烈な入試競争が存在する。専門高校を受験する場合、2025年度では受験生は高校/専門科目の組み合わせを2つまで登録することができるが、ハノイ師範大学附属専門高校では「英語科」は最も倍率が高く22.9倍であり、最も倍率が低い「地理科」でも6.8倍であるし、チュー・ヴァン・アン専門高校では「英語科」は19.8倍と高い競争性が認められる。

第2に、専門高校のカリキュラムの特徴として専門性の高さが挙げられる。専門高校では、高度なカリキュラムが実践され、その進度は早くより多くのことが教えられるという。具体的にハノイ国家大学外国語大学附属外国語専門高校（以下、外国語専門高校）の英語科カリキュラムを例にすると、ベトナムの一般高校ではそれはヨーロッパ言語参照枠におけるB1レベル（自立した言語使用者）を志向しているのに対して、同校ではC1ないしC2レベル（熟達した言語使用者）に相当するようにカリキュラムが編成される。こうした高度なカリキュラムを実践するべく専門高校の教員には高い専門性が要求され、具体的に外国語専門高校の教員は全員が修士号以上の学位を有しているという[(5)]。また、後述する「優秀生徒選抜試験」の準備として、特定教科における専門性を強化するべく一定期間当該教科の学習に特化したカリキュラムを実践する専門高校もある[(6)]。

そして第3に、専門高校の進学状況をみれば際立った国際性が確認でき、専門高校では、より多くの生徒が国内外の有力大学に進学する体制がある。一般的に、専門高校は30%程度の卒業生が奨学金を得て諸外国の大学に進学するという。とりわけ専門高校システムの頂点に位置づくとされるアムステルダム・ハノイ専門高校（以下、アムステルダム専門高校）では卒業生の50%程度が留学し、欧米の有力な大学としてモナシュ大学、シドニー大学、キングスカレッジロンドン等で学ぶ[(7)]。実際に多くの専門高校のホームページからは生徒の「留学・奨学金」の状況が確認できる。外国語専門高校では、日本への留学に限定しても2025年には8名の生徒(6名は日本語専門クラス、2名は英語専門クラス）が文部科学省から給付奨学金を獲得し、京都大学や九州大学等へ進学することが示されている。そこでは、各生徒の「社会への貢献とグローバル人材」への志向性が強調されている。

3.2. 専門高校の卓越性：国家級優秀生徒選抜試験を手がかりに

こうした特質に加えて、専門高校の卓越性を考えるうえでは、ベトナムの国家級優秀生徒選抜試験におけるその位置づけについて検討する必要がある。国家級優秀生徒選抜試験とは、毎年教育訓練省によって実施される高校生を対象とした全国規模の統一試験であり、特定教科において高い学力ないし専門性を示した優れた生徒を選抜し表彰を行なうものである。生徒は一教科のみ受験する。類似の制度に学校級優秀生徒

選抜試験や地方省級優秀生徒選抜試験があるが、通例、より規模の大きい上位試験の受験者に選ばれるためには一段階規模の小さい試験で優秀な成績を収める必要があるため、国家級優秀生徒選抜試験は各教科において最も高い学力を有する高校生を選抜するための試験であるといえる。

国家級優秀生徒選抜試験規則では、その目的は高校において「優れた教育と優れた学習」を奨励すると同時に、「教科学習において優れた才能を備えた人物を発見し、優れた人材を育成するための基盤を創り出し、国家発展に有為な人材の育成を行なうこと」と規定される（第 2 条）。ここには専門高校の一般目標との類似性が指摘できる。国家級優秀生徒選抜試験の結果は毎年メディアを通じて報じられるが、ここで強調する必要があるのは、国家級優秀生徒として表彰を受けるのはそのほとんどが専門高校の生徒であり、この試験が専門高校の卓越性と威信の高さを社会に認知させるためのチャネルとなっていることである。

表 2 は 2022 年度の国家級優秀生徒選抜試験の結果について、ベトナムの主要都市であるハノイ市とホーチミン市に加え、最も貧困率が高いとされるハザン省をはじめ、北部山岳地域に位置するライチャウ省を事例として、各地方省・中央直轄市立の高校に在籍する生徒で表彰を受けた者（一等・二等・三等・奨励賞）の人数とその内訳を示したものである。

表 2 からは大きく、次の 3 点が明らかになるだろう。第 1 に、ベトナムにおいて国家級優秀生徒として表彰を受ける生徒はその極めて大多数、ないしほぼ全員が専門高校に在籍する生徒である。言い換えれば、教科ごとに全国レベルで最も高い学力を有する生徒層は専門高校で学んでおり、こうした状況が中等教育システムにおける専門高校の高い威信に結びついている。

第 2 に、ハノイ市の専門高校群を頂点として、国家級優秀生徒受賞者の分布状況には地域間における較差が存在している。総じて、政治的・学術的な中心都市であるハノイ市や経済の中心都市ホーチミン市ではその人数が多く、貧困率が高い地域ほど人数が少ない傾向にある。

ただし第 3 に、そうした相対的に困難な地域を多く抱えるハザン省においてさえ、専門高校は少数ではあるが国家級の優秀生徒として受賞された生徒を輩出している。この点で、こうした専門高校はベトナム周縁地域におけるエリート人材の養成拠点として位置づけることができるだろう。なお、表 2 では示されていないが、これら 3 つの特徴は全国的にあてはまる。

表 2　ベトナム都市部及び周縁地域における 2022 年度国家級優秀生徒選抜試験の結果

ハノイ市立高校在籍受賞者（数学・物理・化学・生物・情報・語文・歴史・地理・外国語）	141 名（専門高校生徒：139 名。うち、100 名はアムステルダム専門高校の生徒）
ホーチミン市立高校在籍受賞者（数学・物理・化学・生物・情報・語文・歴史・地理・外国語）	60 名（専門高校生徒：60 名。うち、39 名はレホンフォン専門高校の生徒）
ライチャウ省立高校在籍受賞者（語文・歴史・地理）	5 名（ライチャウ省専門高校の生徒：5 名）
ハザン省立高校在籍受賞者（語文・歴史）	2 名（ハザン省専門高校の生徒：2 名）

（出典）教育訓練省質管理局「2022 年度国家級優秀生徒選抜試験及び表彰結果一覧」（Bộ giáo dục và đào tạo, Cục quản lý chất lượng. Danh sách kết quả chấm thi và xếp giải trong Kỳ thi chọn học sinh giỏi quốc gia THPT năm học 2022-2023）各地方省版より筆者作成。

４．専門高校教師と私的補習との相互関係：外国語専門高校教師の事例から

ベトナムにおける専門高校への高まる進学熱を背景に、2023 年 6 月 13 日に国営テレビ局 VTV（ベトナムテレビ）は「進学先は専門高校か、一般高校か」という特集を組み、同番組内で専門高校を受験する予定の子弟をもつ保護者にインタビューがなされた。そこでは、進学後も高度なカリキュラムのもと生徒には過度な競争とプレッシャーが強いられることが強調される一方で、専門高校を卒業した後の生徒の「成功」を強調する保護者の映像が映し出されている[(8)]。前節の議論をふまえると、保護者が個人の「成功」を保障する機関としての専門高校観を抱くのは当然ともいえる。こうした専門高校観を背景に、ベトナムでは都市部を中心に、主として専門高校に入学することを目的に私的補習が展開してきている。本節では、外国語専門高校教師への聞き取りを中心に、専門高校教師と私的補習の相互関係について検討しよう。

すでに述べたように、ベトナムにおける私的補習の主要な形態としてはセンターが挙げられるが、2024 年に「5 つの禁止」が出されたことで、法規上、現在はこれまで主たる形態の 1 つとされた現職教員による私的補習の提供は認められなくなり、センターを展開する法人の活動に参加するという形式でのみ現職教員による私的補習の提供が可能となっている。

一般的に言えば、上位校への進学を目的として私的補習を受ける場合に受講生が重視することの 1 つは、当該センターや講師が培ってきた進学実績や教育の質であろう。聞き取りからは、ベトナム都市部において受講生や保護者に対して最も訴求力をもつのは、専門高校の教師が私的補習を提供するタイプであることが強調された[(9)]。以下では、なかでも最も訴求力が高いといえる専門高校の英語科教師による私的補習の実態を取り上げる。

H 女史は 2011 年度より外国語専門高校の英語科教師として勤務するとともに、私的補習を実践してきている。いわゆる「スター講師」であるといえ、ベトナムにおいて非対面形式での教育体制が採られたコロナ禍では、最大で 2,000 人程度の受講生が H 女史による単独のオンラインの英語講座で学んでいたという。受講生の規模が拡大した要因として、H 女史自身が専門高校の英語科教師であること、宣伝広告は出さないまでも、彼女のもとで私的補習を受けることが専門高校への入学につながるとする口コミが広がったことが指摘された[(10)]。

2025 年現在、H 女史は自宅や外国語中学校の教室を使用し対面形式のみで私的補習を展開している。1 週間に 40 時間程度を私的補習の実施にあてており、中学生を主たる対象としながら 400 人ほどの生徒が受講している。口コミの影響を受け、「越境」して H 女史のもとで私的補習を受講する生徒もいる。具体的には、多くの受講生はハノイ市内の都市部に居住しているというが、同市の遠隔地域から受講しにくる生徒もいるし、中学生の受講生のなかには日曜日にハノイ市から 200 キロ程度も離れたタインホア省から片道 3 時間かけてバスを乗り継いで受講しにくる生徒もいるという[(11)]。

H 女史によれば、彼女が私的補習を実施する目的は受講生を専門高校に入学させることである。そのため、受講する前に学力試験を実施し一定の学力層のみを対象にしているという。またその動機は大きく、①自身の収入の増加を図ること、②専門高校への入学を希望する中学生の学習ニーズに応じること、そして③専門高校の入試問題を中心に、入試傾向の分析や入試問題の研究を通じて教師としての専門性を高め、知識を更新することである。これらの動機は

また、私的補習を展開するうえでの訴求力を高めることにつながっている。

こうした専門高校教師個人の事例に加えて、センターと専門高校ないしその教師が組織的なつながりを有する実態についても検討しておく。すでに述べたように、ハノイ都市部では、センターが専門高校をはじめとする名門高校の受験対策を重視し、保護者、生徒のより質の高い教育への需要に対応するようになっている。なかには、その訴求力を高めるために専門高校と固有のネットワークを有し、センターのカリキュラム構築において専門高校から協力を得たり、専門高校の教員によって授業が実施されたりするセンターも存在する。外国語中学校において相対的に多くの生徒が通うセンターとして、例えば「UP 英語センター」が挙げられるが、そこでは、高校受験の準備のためアムステルダム専門高校などのハノイの専門高校と協力体制を構築していることが強調されている[(12)]。H 女史によれば、「UP 英語センター」には、当初アムステルダム専門高校の英語科教師が個人的に私的補習を実施していたところ、受講生の規模の拡大を受けて企業型のセンターに改組した経緯があるという。

こうしてハノイ市の状況をみれば、特に専門高校への入学を目的として私的補習が展開される場合、その主要な部分は専門高校の教師によって担われていることが推察される。専門高校の教師は、ベトナム社会における専門高校への進学意思を背景として、その専門性や威信、専門高校というブランド性のもとで多くの受講生を私的補習に引き付けているのである。

5．考察

以上、体制移行に伴いベトナム都市部ではライフコースの理想像はいかに変容したのかという問題意識から、中等教育システムにおける英才中学校と専門高校の卓越性を手がかりに、ハノイ市を事例に学習者を私的補習へと駆り立てる構造（駆動構造）について検討してきた。ここまでの議論をまとめれば、それは次のようになるだろう。

第 1 に、従来体制では社会主義建設を進めるための道徳ないし政治性と専門的知識を備えること、すなわち「紅と専」が重視された。高等教育を受けた国家官僚や教員をはじめとして、知識人層は学歴・職業が名誉の対象とはなっても、そのことが所得に反映されることはなく（いわゆる、「貧しさを分かち合う社会主義」（古田 2015））、その小規模性からライフコースの理想像として社会に受容されるものではなかった。こうした後期中等教育・高等教育の小規模性と非競争性のもと、私的補習はあくまで局所的に展開したといえる。

第 2 に、体制移行の過程において、ベトナムは学歴社会としての様相を帯びるようになることで、全体として「紅と専」というよりは「専」を重視する社会へと変容してきている。工業化と現代化を重視する党と国家の方針に加え、ベトナム社会の教育熱を背景に、中等教育システムは拡大と多様化が進められ、専門高校や高品質中学校に関する制度が整備されてきている。特にハノイ市では都市部を中心に、専門高校へと進学すべく児童が厳しい受験競争に参加し英才中学校に入学、私的補習を受講する状況がある。実際としても、外国語中学校では最終学年の生徒はほぼ全員が受験を目的に私的補習に参加していた。

そして第 3 に、ベトナムの専門高校は国家級優秀生徒として表彰を受ける高校生をほぼ独占し、在籍する生徒の高い学力や教師の専門性の点で中等教育システムの頂点に位置づく高校類型として社会に受容されている。そして、一定程度の生徒が奨学金を得て欧米諸国をはじめとする諸外国の大学に進学する体制があることも、専門高校

の威信やブランド性を高める要因である。こうした学習者の人生において「成功」を保障する教育機関としての専門高校観が専門高校への進学意思を高めることにつながっており、学習者や保護者が抱くニーズに応じるように専門高校の教師が私的補習に参入する実態がある。

ベトナム都市部における私的補習への駆動構造について、こうした議論を通じて導きだされるのは次のようなものである。すなわち、私的補習へと学習者・保護者を駆り立てる構造の中心には専門高校が位置付けられ、それは大きくプッシュ要因とプル要因によって説明することができるだろう。すなわち、プッシュ要因として、体制移行に伴う中等教育・高等教育の量的拡張や中間層の拡大を背景に、ベトナム都市部ではよりよい教育機会への競走が社会の相対的に多くの人びとに開かれる「大衆競争社会」と呼びうるような状況になりつつある。専門高校への入学を志向する主要なルートには競争倍率の高い英才中学校への入学が位置付き、そこから多数の生徒が専門高校に入学する構図がある。事実上、英才学校は専門高校への進学を推奨し、在籍生徒も主として専門高校への入学を目的に私的補習に参加しているといえる。

プル要因として、専門高校は国家レベルの極めて高い学力を有する生徒を在籍させ、高学力層の生徒に応じる高い専門性を有する教師集団を抱えるのみならず、諸外国の大学と接続している点で、ベトナム中等教育システムの頂点に位置づく。こうした卓越性が専門高校やその教師に威信とブランド性をもたらしており、「越境」受講者の存在が示すように、それを背景に専門高校教師は生徒・保護者に対し高い訴求力をもって私的補習を展開してきている。センターも、専門高校やその教師と連携することで訴求力を高める構図がある。

総じて、こうした私的補習への駆動構造の特質は、制度上専門高校は才能教育機関として特殊な中等教育機関として定義され、高校生全体に占めるその割合を「2%」とするという量的な抑制が強調されているにもかかわらず、実態は受験名門校としてベトナム社会に受容されている点である。実際として、都市部を中心に専門高校が多くの保護者や中学生に魅力的な進学対象として認識されるようになっていることもこのことを裏付けるだろう。

最後に、こうした考察の内容と強く関連することだが、体制移行の過程で生じているベトナム都市部の新しいライフコースの理想像について付言したい。すでに述べたように、ベトナム社会は現在、「紅と専」から「専」をより重視する社会へと変容し、そこでは高い専門性を備えることが重視されるようになっている。従来体制において尊敬を集めたエリート像は、後期中等教育と高等教育が極めて限定的であった状況のもと、高校でホーチミン労働青年団員となって大学に進学し、国家機関等に配属された後、社会主義建設のために国家・社会に奉仕する知識人像であったといえる。これに対して現在、体制移行の過程ではベトナム都市部における新しいライフコースの1つとして、次のようなコースが浮かび上がる。それは、高い競争倍率の英才中学校に入学、そのうえで専門高校に進学し、欧米諸国をはじめとする諸外国への留学を経て「グローバル人材」になるという現代ベトナムのエリート像なのである。VTV のインタビューにおいてある保護者が強調したように、このことは人生の「成功」を保障する専門高校観に基づくものだが、それはまたベトナム中等教育システムにおいて熾烈な競争を突破した少数の勝者に焦点を当てた見方に他ならない。

おわりに

本稿では、ベトナムのハノイ市都市部を事例として私的補習への駆動構造を検討した。体制移行に伴いベトナム社会は「紅と専」を重視する社会から「専」をいっそう重視する社会、すなわち個人の専門性や業績が重視される学歴社会へと転換してきている。そのなかで専門高校は、諸外国の大学と接続し「成功」を保障する受験名門校として認知されており、私的補習への駆動構造の中心に位置づいている。具体的には、プッシュ要因として都市社会の競争性のもと、英才中学校では生徒に専門高校への進学を奨励する構図があること、そしてプル要因として専門高校教師は高い威信とブランド性のもとで私的補習を展開し、そのことが多くの学習者を惹きつけている構図があることが明らかになった。こうした構造から、都市部を中心としたハノイ市の理想的なライフコースの１つとして「英才中学校から専門高校に進み、留学を経て、グローバル人材となる」現代ベトナムのエリート像があることが洞察される。

本稿の成果をふまえ、ハノイ市を主たるフィールドとしてベトナム都市部における私的補習の駆動構造をより立体的に捉えるためには、第１に、専門高校・通常高校への進学を支援するセンターにおける私的補習の実態に関する研究が必要である。加えて第２に、ライフコースの理想像とも関わるが、専門高校の卒業生について留学群と非留学群のキャリア形成の異同に関する研究が必要である。以上を今後の課題として、ベトナム教育研究を進めていきたい。

注（URL は 2025 年 11 月 26 日最終アクセス）

(1) 言うまでもなく、当時のベトナムにおける初等教育段階の就学率をふまえれば、後期中等教育や高等教育の就学率はこれらの数字よりさらに低いものとなる。

(2) 2023 年 9 月 7 日に筆者が T 女史の自宅において実施した T 女史への聞き取り。

(3) 2025 年 10 月 15 日に外国語中学校校長より入手した同校保護者会の資料に基づく。

(4) 2022 年 1 月 29 日に筆者が Zoom 上で実施した外国語中学校校長への聞き取り。

(5) 2025 年 10 月 14 日に筆者が外国語中学校で実施した H 女史への聞き取り。

(6) 2025 年 3 月 20 日に筆者がホーチミン市内のカフェで実施した、ホーチミン市国家大学社会・人文科学大学教員への聞き取り。

(7) 2023 年 9 月 13 日に筆者が Zoom 上で実施した、アムステルダム高校教師への聞き取り。

(8) 2021 年 1 月 12 日の VTV による「専門高校を選択するべきか」とする番組内では、キャスターは専門高校における生徒の「成功」と「他校にはない威信」について言及している。

(9) 2023 年 9 月 12 日、移動中に語られた外国語中学校校長の発言内容。

(10) 2024 年 2 月 21 日に筆者が外国語専門高校で実施した H 女史への聞き取り。

(11) 2025 年 10 月 14 日に筆者が外国語中学校で実施した H 女史への聞き取り。

(12) http://uponline.vn/news/n/106/trung-tam-tieng-anh-up より確認。

参考・引用文献

（日本語文献）

岩井美佐紀（2004）「(22) 階層分化：貧富の拡大」今井昭夫、岩井美佐紀編著『現代ベトナムを知るための 60 章』明石書店。

ジール、Z. ジャネット、エルダー、H. グレン (2003)「ライフコース研究：ひとつの分野の発展」ジール、Z. ジャネット、エルダー、H. グレン編著、正岡寛司、藤見純子訳『ライフコース研究の方法：質的ならびに量的アプローチ』明石書店。

関口洋平、吉村夏帆（2023）「韓国およびベトナムにおける公教育の現状と課題に関する比較研究：学歴社会と教育格差という視点から」『畿

央大学紀要』第 20 巻、第 2 号、12-27 頁。
関口洋平（2024）「現代ベトナムにおける大学入学者選抜制度の改革原理：公正性という視点から」『畿央大学紀要』第 21 巻、第 1 号、13-27 頁。
古田元夫（2015）『（増補新装版）ベトナムの世界史：中華世界から東南アジア世界へ』東京大学出版会。

（外国語文献）

Bộ giáo dục và đào tạo (1995). *50 năm phát triển sự nghiệp giáo dục và đào tạo (1945-1995)*. Hà Nội: Nhà xuất bản giáo dục Việt Nam.
Bộ giáo dục và đào tạo, Cục quản lý chất lượng (2023). “Danh sách kết quả chấm thi và xếp giải trong Kỳ thi chọn học sinh giỏi quốc gia THPT năm học 2022-2023.”
Bộ giáo dục và đào tạo (2024). Thông tư số 29 ngày 30 tháng 12 năm 2024 về Quy định về dạy thêm, học thêm.
Bray, Mark (2023). “Understanding private supplementary tutoring: metaphors, diversities and agendas for shadow education research.” *Journal for the Study of Education and Development*. Vol.46, No.4, pp. 728-773.
Dang, Hai-Anh (2007). “The Determinants and Impacts of Private Tutoring Classes in Vietnam.” *Economics of Education Review*. Vol.26, No.6, pp.684-699.
Dang, Hai-Anh (2008). *Private Tutoring in Vietnam: An Investigation of its Causes and Impacts with Policy Implication*. Saarbrücken: Verlag Dr. Müller.
Nguyen, Thi Phuong Bich, Le, Minh Hang, Duong, Hang Bich (2025). ““Why do I risk my professional reputation to do it?” Vietnamese teachers’ motivations and identities in relation to private tutoring” *Asia Pasific Education Review*. Vol.26, pp.781-794.
Thủ tướng chính phủ (2010). Quyết định số 959 ngày 24 tháng 6 năm 2010 về phê duyệt Đề án phát triển hệ thống trường trung học phổ thông chuyên giai đoạn 2010-2020.

Driving Forces of Private Tutoring in Vietnamese Secondary Education: The Emerging Life Course Vision in Urban Areas

Yohei SEKIGUCHI
Kio University

This study investigates how the life course vision in urban Vietnam has transformed during the country's transition from a centrally planned to a market-oriented economy system, and explores the structural forces that drive students toward private tutoring. Focusing on the excellence of special lower-secondary schools such as high-quality junior high schools and specialized high schools within the Vietnamese education system, the research uses Hanoi as a case to illuminate the mechanisms that propel learners and the parents into private tutoring.

The paper first examines the characteristics of secondary and higher education under state socialism—when a planned economy shaped both schooling trajectries and life course vision. It then analyzes social transformations that have emerged during the transition period and their impacts for secondary education. Special attention is paid to the educational characteristics and tutoring realities surrounding special lower-secondary schools, as well as the institutional features of specialized high schools. The relationship between teachers at specialized high schools and the private tutoring sector is also scrutinized. These analyses form the basis for the final discussion.

The study reveals that Vietnam's transition has produced an increasingly credential-oriented society in which individual expertise and academic performance are highly valued. Within this context, specialized high schools have come to be recognized as prestigious, examination-elite high schools that provide pathways to international universities and guarantee the students "success." They lie at the core of the driving forces behind private tutoring. Push factors include the competitive nature of urban society, in which special lower secondary schools encourage progression to specialized high schools. Pull factors arise from the high status and strong brand power of specialized high schools and the teachers, who actively engage in private tutoring and attract large numbers of learners.

These dynamics suggest that a new idealized life course has emerged in urban Hanoi: progressing from a special lower-secondary school to a specialized high school, studying abroad, and ultimately becoming a "global talent." This pathway reflects the evolving image of the contemporary Vietnamese elite.